

お高くはありません。」などとお愛想を並べる。新しい帽子、新しい靴、時計何でも目当たり次第に無意識的に値段を聞くのである。中には横濱から上海までの舟賃のことまでも序に聞いてしまふ人もある。何れもみな挨拶の言葉の代りくらゐにしか思つてゐないのである。

人に向つてかねの話をする事は、日本では教養のある人はつとめて避けたがるけれども支那では月給のことも平氣で相手に尋ねる。又自分のことも打ち明けてしまふ。甚だしきは、細君の數までも尋ねる。こちらで一人しかないといふと、自分の方は三人ある、などとさも誇り氣に述べるものもある。かういつた點は實にあつさりしたもので、對話の上の珍らしい變つた話題となると、随分痛快な材料を見出すこともあるのである。若しそれ七八十歳以上の老人などを相手に話す際などは、不老長壽、若返りの秘法などの最も支那氣分に富んだ話から、蛇酒、蛇の料理などといふ珍題目も出て來て随分面白い。支那の人は家庭にあつても存外かまはず中なか立ち入つたことを自らしやべり出し、家族のものゝ手前など少しも遠慮をしない。至つて大びらで、門戸開放的の氣風が見えてゐる。元來その方面の表裏が既に常識的となつて

をり、それが久しい間習慣づけられてゐるのである。

極めて懇意な間柄になつてゐる家庭であるときは、主人の案内で奥さんの部屋に通されることがある。そして行きなり椅子によつたり寢臺に腰かけたりしながら互に打ち寛いだ冗談まじりの話もしたりする。また時には麻雀を共どもにやつたり可なりからからした楽しい空氣をつくつて呉れたりするのである。かゝる折に、奥さんへ話しかける言葉でも、主人に話しかけるときと同じやうな態度で以つてするのであるが、奥さんと互に視線の合はないやうにしてゐることが安全である。このやうなところにも成るべく細やかな注意を注いでゐる方がよろしい。實は少々は構はないのであるけれども、それも程度次第で、相當に打ち解けた冗談の一つも奥さんと云つて差支へのない程の懇意になつてゐるものなら別である。しかし多くの場合に支那では家庭の奥までは這入れない。大抵應接間あたりで用談を済ませてしまふ。餘程開けた家庭でゝもないと、婦人同伴で料理屋まで招待して出かくるなどといふことは支那の國情として許されないのである。たゞ挨拶として、奥さんの御臨席を願ひたかつたといふ位のことには差支な

い。殊に、「第三夫人、第五夫人の御臨席をこの次には、」といった程度で餘韻嫋嫋でおく方がよいのである。このあたりは極めてデリケートである。宴會半ばで、話題が次第に進展し随分極端なところまで來ても、支那の人はその向けられた鋒先にたじろかない。愈々出でて愈々妙趣と云ふところまで導いて行くのである。

支那旅中の祕密の方面の要領は、その人情美を視察してその幽玄な方面にまで立ち入ることである。その邊の妙味を味はなくしてただうは面のビジネスにのみ忙はしい日を送つてそれでおしまひにして歸朝するのは、龍を描いて眼を入れなかつたのと同じことになるのである。それで如何なる程度の支那旅行者にしても、支那に踏み込んだ以上は兎もかく支那の人々と言葉を交はし、意中を語り合ひ、腹と腹とで相互に接觸して唯今述べたところまで至らねば嘘である。わざ／＼時間と費用とをかけて來た甲斐がないのである。さもないければ來ないでたゞ日本にゐて書物を読んだだけでもよいのである。人の話の見聞談でも澤山である。自ら親しく或るものに觸れて來ない視察旅行は、支那行脚の核心を擲んでゐない旅行だと評さねばならぬ。と

は云ふものゝそれにはよほど慣れて來ることが必要である。支那の視察旅行は何回となく度數を重ねるに従つて次第に、その先方の眞面目が判り、眞の情調も味ひ得られて、深い人情美の漲つてゐるところに考へが到るわけである。支那へ渡る人々の普通はただ忙はしい事務的であるだけのものが多い。そのため、何等暖かい味ひのある核心に觸れた旅行ぶりを發揮するものが少ない。これは、學生青年にしても、實業家、役人にしても、畫家小説家、僧侶にしても、或は軍人にしても、何れにもあれ齊しく注意すべきことである。

二三 通信の方法に就いて

日本人は通信方法の細かく完備してゐる國土に生れてゐるので不自由な目に遭つたことのない爲め、支那へ行つても同じやうに不自由な思ひはしないものだ位に考へてゐる。所が、上海その他の大都會に行つて見ても日本のやうに便利には行かぬ。況して、一步踏み出して田舎に這入つて見ると郵便電話の至つて不完全であることは云ふまでもなく、さらばと云つて飛脚な

どの便も思ふやうには備つてゐない。前にも述べたやうに、驛の附近にポストのあるところさへ少なく、假りにあつたとしてもさう手軽く頻々利用の出来るやうには行つてゐない。實際から云つて支那の旅行中は日本へ通信することは思ふやうに行かない。容易でないのである。日本の方ではハガキの一本くらゐと直ぐ来る。至つて無雑作に考へてゐるが、支那の奥地にも這入れれば十日も二十日も又それ以上も實際出せないものである。何處にポストがあるか、郵便局があるかそれさへ判らぬ。元來通信事務などは超越して、社會生活の行はれてゐる處であるからこの始末であるのだらうと思はれるくらゐである。尤もかの武陵桃源のやうな仙境へでも這入り込んだ場合には、自分自身でも通信のことは氣にならず忘れてしまふ。こゝに支那旅行の感化として得られたいゝところがあるわけである。しかし雲烟萬里を隔てゝゐる故國家郷の方ではかなり之を案じてゐるのである。若しそれ、秋の末つかた、漢口を立つて滅水期の最終の舟で四川省にでも入り込んだとするならば、その乗つて來た舟の歸り便にでも手紙を托さない限りは、あとはその年のうちにはむづかしい。あとは民船の便によるのであるが、それも

滅多に出ないから殆んど音信が不通になる。そのため成都、重慶あたりの友人から貰ふ正月元旦の年賀狀が東京へは紀元節も過ぎて二月の下旬、甚しきは三月の節句の頃やつと手許へ届いて來るといふやうな時間を超越した現象を見るのである。こゝは支那でなくては見られないこととで、今日南米ブラジルの首府リオデジヤネイロあたりから來る西半球の郵便物に比べてもそれよりも多くの日數がかかるのである。全くさういつた點は、元來山中曆日なしの國であるとは云へ、あまり呑ん氣に出來てゐるのである。かゝる別天地が今日の文明時代に存在してゐるやうとは誰れも夢想しないことであらうが、實際にあるのだから致し方がない。穴居の民さへ何萬とゐる處だから、通信の方法のことなどで考へられてゐないのである。この太古ながらの生活に甘んじてゐる國土に出かけて行つて、おいそれと事務的の手紙を出さうなどと思ふだけでもおこがましい沙汰である。それ故支那旅行者の家族のものは豫めこの邊のことをよく含んでゐてもらひたいのである。暫く通信が絶えたからといつて、色を亡して外務省へ驅つけ問合せるなどの取越し苦勞はせずともよろしいのである。かやうな際に肝腎の向ふにゐる當

の本人はよい氣持で山中の田舎宿にでも泊し月を眺めながらうまい支那料理に舌鼓を打つてゐるであらう。

しかし旅行者としては、なるたけ支那の葉書切手などの品切れにならないやうに常に鞆に用意をしておくことが肝腎である。そして、氣のついた時分には田舎でもどこでも書けるだけ書いておくといふことがよろしい。大都會に來ればきつと忙はしくて時間がないにきまつてゐる。そこで田舎で書き溜めてあるのをポストに入れるといふ位の心掛けでゐなければならぬ。なほ支那では前にも云ふ通り地方に出ても繪葉書くらゐはあらうなどと期待することは全く出來ない。電報もむづかしい。あつても漢文電報にしても、ローマ字電報にしても、料金が馬鹿に高く、且つ時間も可なり長くかかる。實際は大都會でなくては電報は打てないのであるから田舎では利用しようにも利用の仕方がないのである。

二四 便所の話

支那に渡つて日本人に何が一番困るといつても便所のことぐらゐ南北各地を通じて困り入る問題はあるまい。土地の支那人の方で少しも問題にしてゐるわけもないのであるが、日本人は朝夕これには弱らされる。慣れない人は、折角支那宿にも泊つて見たが、「何分にも出るものが出ない」といつてゐる。これに何等不自由を感じない程度で旅から旅へと渡つてゆけるやうになれば、もう立派な支那通としての資格がついた人であると評される。事は至つて簡単なことながら、北支那の方であれば、朝早くから犬がやつて來て待ち設けてゐるといつたやうな場面をよく見る。百姓のかみさんが赤ん坊の用足しをさせてゐる際、豚が來て待つてゐる。あと片付けをしようと思つてちやんと待つてゐるのだといつたやうな姿をしてゐる。この光景には聊か驚かされるのであるが、かかる場面を少しく記述的に語り出だせば支那の田舎旅行の眞面目を短刀直入的に髣髴せしむることが出來ると思はれる。北支那は空氣が乾燥してゐる土地に濕氣がない。そこで一片の雲もなき青天井の下で、世界に又とない作法で氣持ちのよい處をやらかすのであるから、まことに大陸的であり、氣分も晴れやかであるらしい。決して島國式に三

尺四方の狭い壁の中などにけちな縮こまつた仕方をするのではない。だからまさに天地雲泥の差があるのである。現に支那町の外れあたりでは、朝方早く旅立ちをしてゐると、前方を通る駱駝の悠然たる足並を眺めつゝ、大の男が繪に描いたやうな恰好をしてしやがんで用足しをしてゐるところは屢々見るのであるが、日本の禪坊主もこれまでの氣持ちよき大膽ぶりは演じられないことゝ思はれる。

まさかに支那旅行者がここまで修業を積まなければ支那は歩けないといふのでもないが、かかる社會の眞唯中を通り抜けて行くのであるといふことを豫め御承知願ひたいのである。しかし存外、蠅の脚にも黴菌などついてゐないと見えて、支那の片田舎には村にも町にもペスト、コレラと云つた疫病の流行したことは滅多に聞かない。却つて、神經質の人間のゐる日本とか、支那でも上海とか云ふ外人の多いところにあるやうである。尤も上海といつても、日本の検査官が獨りで騒いでゐるやうに八釜しく仰山氣に騒ぎ立てゝゐるのではない。察するになるべくその流行の季節にでも入れれば、役人は役人根性から上海の虎疫を看板に役人共が豫算も澤山に

見積もり自分だちの仕事の効果を仰々しく見て貰ひたさにその邊から大きく騒いでゐるに過ぎぬ。本場はそれ程でないにも拘らずその頃日本の港では検査をたねに檢便さわぎをしたり忙しい客に永いこと停船をさせたりしてゐるのは、支那人から云はせると、無意味で滑稽にも見えてゐるのである。つとめて日本と云ふ國は何でもない事に騒いでつまらぬ用を多くしたがる處だ。あゝ迄しなければ人口が過剰で就職の都合もつかないのであらうかなどと、不思議がつて取り沙汰してゐるくらいである。

南支那は北支那の方面と幾分違つてゐて、便所の設けは旅館客棧である以上必ずある。それは客室の寢臺の傍におかれた馬桶と稱する蓋付きの桶形のもがそれである。また夜になると小便のために焼物の尿瓶が用意される。わざわざ廊下へ出て行かなくとも室内で済むやうに出来てゐる。これは毎朝早く取片けられ、且つ氣持よく洗ひ清められて香水など入れらるゝものもある位である。この點は日本式の旅館に泊つた時よりも遙かに衛生的であり小ざつぱりして氣持がよい。この馬桶の始末は部屋付のボーイがやるのではない。別にゐる男の役目で、各室の

馬桶を集めて、曉天門の外に取りに来る者に之を渡すのである。内部の容器は清水と鼈とで徹底的によく清められ、そして蓋をした上にまた二重の蓋が出来て各室に戻される。この馬桶の恰好は見た目に不快の念を起させない。と云ふのは圓筒状の腰掛け様のもか又は長方形の漆塗りの櫃のやうなものであつて、その上には物の置ける臺のやうな感じのするものになつてゐるのである。

南方でも江蘇、浙江あたりの田舎宿へ行つて見ると、その方面には一種特別の共同便所があつてそこで用を足さねばならぬことになつてゐる。それは人の通る往來とか又は庭園などのそばに大きな溜池を拵へ、その上に腰を掛けるに便するやう厚板で以て長い蓋がしてある。その蓋には適當な間隔を置いて圓い穴が穿たれてゐる。用のある者はそれに腰をかけることになつてゐる。その場面は極めて衛生的で前方扉もなく暖簾一つ掛つてゐなく全くの明け放しである。道を行く人、近處の人、誰れ人でもそこへ勝手に腰を卸して相並び隣り同士清客が呑ん氣さうに互にお天氣の挨拶や四方山ばなしなどを語りながら、また或る者は火のついた煙管をく

はへながら、又或る者は長髯をしごきながら用を足してゐるのである。中には盛んに力んでゐる者も見える。傍に吊された四寸大に切られた落とし紙は馬糞紙を薄く漉いたやうな粗末な草紙であるが之を引きちぎつてゐる先生もある。全く天下第一品の珍場面である。ところで手洗鉢の水などと云ふやうな日本流のものは固より備へられてゐるわけもないのである。一々用足しの後で手を洗ふことはしないのが支那人一般の習慣である。日本人のやうにお呪式にちよつとでも手を水に浸さないでは氣が済まぬと云ふ神経質のものは一人もゐない。大陸の人は手の汚れない限り一切洗はない。然しながらいくら何でも食事前には必ず熱湯で手を洗ひ清める。日本人には支那の人のやうに、三度三度その食事前にきつと手を洗ふと云ふのはあまり見當らないのである。どちらがよいものであらう。嘗つて支那人に化けて田舎をめぐつてゐた某國の賣藥商人が長年うまくやつてゐたのであるが用便のあとで手洗を求めたことから、はしなくも正體が露顯したといふ話さへある。南方でも田舎の村外れなどでは朝がた黄金の山があちこちと散點してゐるのを見る。これを片付けて行く役目に生れてゐる犬や豚公は骨の折れたもので

ある。この點は南方も北方も勿論同じことである。以上述べたところのこの現代の支那の「解手的地方」(便所)の概略は先づ都會でも田舎でも大抵同じものであると云へるのである。これに慣れない中は、勇氣を鼓して腰を卸して見ても容易に出るものでない。けれどもいよいよ困つて来れば結局その郷に入つて郷に従はざるを得なくなる。この第一の關門を自然に乗り越えることの出来たものは最早や支那行脚の大いに痛快なところを共に語り合ふ資格の出来たものと云へるのである。一日も早く寧ろ得意になつて此の禪味の存するところを卒業し之を人にも語り、勇氣のない仲間に向つては、「なあに譯はないよ。一つ一緒に話しながらやらかさうか。」などと云ひ得る境地まで進むやうになるべきである。浙江省の田舎あたりには殊に多く路傍にこの式の共同連續便所の設備を見る。そしてそこには色の黒い百姓の二三人が例によつて呑みびりと氣持のよささうな恰好で往來の人や、茶種の花咲く野邊を打ち眺めつゝ用を済ましてゐる景色などよく見るのである。

二五 門番と番兵

支那旅行をしてゐると特別の國情から生ずる色々の無理解なことに çıkはすことがあるのであるが、門番の態度とその心理の裏面はその間の消息を知る好材料の一つであらう。門番はその個人の邸宅にゐるものと銀行會社役所のそれとを問はず、一切之を看門と稱ふるのであるが、この看門には大層人物のよいのと悪いのがある。北平の正金銀行の看門は長年その忠僕として門番をつとめ今では七十歳近くになつてゐるが、愛嬌もあり親切であり又その前身が前身だけに風采も堂々としてゐて押出しもよく、如何にも看門としてはよすぎる位で實に理想的のものである。自分が正金銀行を訪ねる際にはいつも晴やかな氣持ちで以つて、先づその横門の地下室に向つて看門と呼びかけるのである。するといつものニコニコ顔をして出て来て「後藤先生」といつて懐かし味をたゝへながら應對してくれる。

凡そ、氣持ちのいゝ看門で長年そこに居付いてゐるもの位よいものはない。長年ゐればその

うちの内部の事情なり、來客の模様なりはすつかりよく心得てゐて、その間適當に取計ひも出來るやうに習慣づけられて來る。すべて看門はうちの關門を守る重任を負はされてゐるものであるから、その内へ通す通さぬはこの看門一人の權限にあると云つてもよろしい。それゆゑ看門に嫌はれたなら、何時でも、奥は没在家で留守だとか、來客中だとか、未だ寝てゐるとか、近來は病氣だとか、種々の言葉をつくらつて門前拂ひをくらはされるのである。

普通の訪問客なら兎もかく、多少の商賣氣でもあつてその家へ品物を持ち込まうとする場合、殊にそのうちに珍らしい泊り客でもゐてその人の注文によつて品物を持ち込まうといふやうな場合などは、看門がいゝ顔をするか否かによつて、その商賣の損得が分れることにもなる。そこで商人などを通すときはその品物が相當の金めのものであるか否かを看門自身としてよく知つておく必要があると許りに、その包物の内容は一體何と何とであるかをしきりと聞きたがるのである。持ち込まうとする商人は昨今のものにしてもなるだけ正直に打ち明けてその値段のところまで云つておく。

固よりその間に賣上げの一割乃至二割は習慣として之に心付けすることにきまつてゐる。その邊の事情からして若しその家庭に於いて、又は泊り客に於いてその品物を買取つたといふ時は商人は固より看門までもが相當な收入を得るわけである。その商人にして若し詐つて奥が買ひとつてゐたにも拘らず、買つてくれなかつたなどといったなら、その次から又品物を賣りに來ても、看門の方で今日は不在だから駄目だ、と云つて通すのを澁る。これはつまらぬことではあるが、如何に看門がその方の實權を握つてゐるかの消息の一斑が分る。それで歴代の大總統、督軍などの大官連の看門をしてゐたものは、數年も経たぬうちに巨萬の富をつくり、一廉の財産家として素晴らしい勢を示すものがある。従つて名門の家の看門の位置は、幾萬といふお株になつてゐて、中には三萬五萬といふまとまつた金を出さねばその看門の位置が譲つてもらへないといふやうな事實もあるとの事である。一つの口に對していつもあまたの競争者が現れるので容易に望む者の手に落ちぬといふことである。かたがたその株は競り上げられて來るのである。下手な役人や商人になるよりもこの大官名門の門番をした方がいくら割がいいか分らぬと

云はれてゐる。これはどこでも支那での著名な話題になつてゐて、支那を知るには實に面白い話である。旅行に出かける者はこの邊のコツを心得てゐてその緩急よろしきを得るやう振る舞ふことが必要であると思ふ。

尙大官名門の家を訪問する場合に於いて注意してゐるべきことがある。それは度々名門大官に出入しいろいろ仕事の上で夜遅く訪ねることがあつたり、夜半に門を辭し去つたりすることがあると、かなり厄介を看門にかけるわけである。かゝる折には常識として、相當の心付けを之に握らせておくのである。この方法をとつてゐない時には、例の調子で體よく斷られることがないとも限らぬ。或はそのために九分通り成功しかゝつてゐた仕事がうまく行かなくなるといふやうなこともある。或は又折角取次ぎに名刺を出してゐても、それが奥まで達しないことがある。これは家の構造を見ればすぐ判ることであるが、看門の居る入口から、奥の主人の室まではかなり中間に中庭があつたり、相當の距離があるものであるから、その門を叩いて名刺を渡したとしても、その邊の様子は奥まで決して分らぬのである。全然その氣配さへ知られな

いから、中間で何ういふ芝居が打たれてゐても主人は知らない。客にはもとより分らう筈がない。かういつた譯で、單に名刺を通ずるだけでも、その來客の氣持が全部奥へ達するかどうか判らぬといふことがある。この點は支那に於いてどうかすると實際あることであるから承知しておかねばならぬ。その代りに、又丁寧な主人になると、名刺による取次ぎが無事に済み、奥へ通され挨拶の交換されてゐる際など、主人自ら立つて恭しく、只今頂いたこれは閣下の御名刺であるからお返し申し上げておきます、と云つてねんごろにそれを返してくれることさへある。奥へ通されて見ると、存外氣持がよく、からからと打ち解けた態度で愉快に談話を交へて呉れるのである。

その固く閉ざされた表門を守る看門は態度が時には随分つんとしてゐて、我不關焉の顔付きをしてゐる場合も相當にある。如何にも無愛想な振りをしてゐるので、慣れない人はその第一印象で嫌な氣分を咬らるゝといふものも少くない。然し一々ニコニコとして迎へてばかりゐては舐められるといふことも考へてやらねばならぬ。主人から云へば第一線に立たせてある豫防

線とも見るべきものであるから、さういふ態度をとらせるやうに豫め看門に含ませているのかも知れない。よくピストル騒ぎの突如として起り得る支那町のことであり、殊に夜分などは迂つかりしてゐられぬこともあるのであるから、そのやうなことを考へて見ると看門の無愛想にも多少理由が見出されるのである。

支那街の周囲はもとの縣以上の大都城である場合には必ず城壁で以て取り圍まれ、その城壁には東西南北の四方面に城門がそれぞれ設けられてゐる。城門は二階のついた樓門の形をとつてゐるのが普通である。その扉は高さ二十尺、或はそれ以上の堂々たる嚴めしいもので、觀音開になつてゐる。その面に幾條となく横に打並んで打たれてゐる鐵の鉞がある。頭はさながら大の茶椀を伏せた位のもので見えるからに物恐ろしい感じを與へてゐる。

城門には晝夜の別なく警備の兵隊が數人、いつも劍付き鐵砲の武装姿で屯してゐて城門出入の行人を鋭い目で以つて一々見張つてゐる。門扉には時局の際など物々しい氣持ちを漾はしめ懸賞になつてゐる敵の大將の顔であるとか、注意人物の顔、大犯罪人の顔であるとか手札形

の寫真で一々之を示し、それに姓名その他の文字が記入されてゐる。或はそれに關聯したピラなども一ぱいに貼られてゐる。兵隊はこれと城門を去來する行人の顔とを見比べてゐる。そして合致した顔でも見つければ直ぐいきなり逮捕して、之を公安局へ拉致するのである。さう云ふと公布されてゐた懸賞金の全額或は幾分かはその連中に支拂はれることになつてゐる。

城門を去來する行人の手荷物とか天秤棒で運ばれてゐる大荷物などは勿論一々誰何してその内容を調べあげるのである。異常なくばすぐ通過を許可する。自動車などでも北平朝陽門や阜成門の如くその郊外へ出て行つても差支へないといふ許可證を持つてゐるかどうかを調べ、若し持つてゐなければ罰金を取るといつたやうなことをする。それ故、北平あたりの郊外をドライブするやうな場合には、豫めその許可の鑑札の有無を確かめた上でないと、飛んだ目に遭ふことがある。心すべきことの一つである。又時折り聞く話であるがその都落ちを考へて城外を逃げ出すといふ注意人物などが出来るだけその汚ない洗濯物のシーツの中にくるまつて隠れたまゝ逃げ出さうと云つた風の色々の喜劇、悲劇はいつもこの城門を背景として演ぜられるの

である。兵亂の際に見る城門破りの一幕の如きは、この警備兵の門衛の態度一つで成敗何れにでもなる。これをうまく懐柔し買収することが出来ればこの門破りは易々たる仕事である。かかる事情から考へて見ると、支那の城壁を見廻つてゐる門衛の任務は重大なものである。それだけに又危険も多く、また意外の幸運にもぶつつかるわけである。これは又支那行脚の中でなくては見られないことである。めざましい場面的一幕である。支那旅行中に必ずくゞるところの城門に就いては尙心得ておく可きことが数々あるであらうが先づこれ位の處で以つてそのあとは委細面談と云ふことにしておかう。

二六 飯屋と菜館

支那旅行はなるたけ賑やかに出来るだけ民衆的に處して、自分を社會の大きな流れと合流せしめ民衆の動きとその生活の基調に釣り合つて行くやうにして行かなければならぬが、その方法の一つは支那の飯屋に出入することである。時間のない忙はしい旅行には一々八釜しい堂々

たる料理店にのぼり、數多き料理を漁つてばかりゐてはやり切れない。それよりも成るたけ簡單であつて要領のいいところに這入り込み、そして民衆と出来るだけ接觸するがよろしい。それには、共同の飯屋に立寄つて自分の目の前で鍋から直接に皿にとらせ、それを即座に平げて、勘定をして立つ、といふ風にするのがよろしい。簡單ではあるが、そこには肉もあり魚もあり野菜もあり、天麩羅・お汁もの・什錦飯・炒飯・支那蕎麥の類、その他何でもござれの即席料理が出来るのである。支那町の軒によく

隨意小酌
包辨酒席

と看板の文字のあるのを見付けて這入つて行けば間違ひはない。かういつたところへ氣輕るに這入つて無雜作に見知らぬ品を注文し、香の高い酒を傾けて、その氣分に浸るといふのは、通人でもなくては出来ないことであるが、然し支那へ渡つた以上には、かう云つたお手輕るめしやを極り悪く考へてホテルで鹿爪らしくナイフ・フォークの使分けばかりでは全く面白くなく

趣味がない。それに第一支那旅行の意味をなさぬのである。

飯屋の情調は支那氣分を體驗する上に、最も手軽るくて、又頗る効果の多いものであるが、更に進んでは時に晚餐を同行者と共にとり、ちやんとした料理店に行つて、卓を圍み乾盃をするといふこともよい。それにはいつもの飯屋では物足りないであらう。支那は到る處に所謂、茶館といふがある。茶館とは支那料理店のことである。これは上海あたりなれば、三馬路、四馬路あたりに行つて見るといくらでも大きな茶館が軒を並べてゐる。そこには蘇州料理もあれば、鎮江料理・揚州料理・福建料理・寧波料理・廣東料理、それに變つた料理としては四川料理・山東料理・北京料理と何でも御座れである。この方面はかなり遊里の巷として知られたところだけに、それぞれ評判の特別料理が出来てゐて、醉蟹であるとか、竹孫、冬虫夏草の料理の如き奇妙なものも出来る。何れもこの邊の茶館ならば信用のおける一流どころであるから、客を招くにもよし、自ら招かれてゆくにも憚りのないところである。なほ二次會として出かけるところには、別に阿片室の用意の出来た、やや専門にわたる通な遊び場所も澤山ある。こ

の方面のことはここでは詳述する暇がないから省く。この外支那料理の喰べ方、食卓の禮儀作法、客として招かれた際の心得、珍料理の材料、調味法などの支那料理の通人と知つておくべき事柄に就いては、これも精しく述べたいのであるが頁が許さないので、已むなく省いておく。但しこれ等のことに就いては同じ通叢書中、支那料理篇でその大要を紹介しておいたからそちらを参照せらるれば幸甚である。

今一つこゝに附加しておきたいことは、支那旅行者の目に南北各地方でいつも必ず、「中西茶館」といへる看板を見らるゝことである。これ迄旅行者のいふところを黙つて聞いてゐると、日本人の中西といふ料理屋は盛んなもので随分各地方に支店を出して堂々とやつてゐる。日本人の中西といふものゝ勢力もたいしたものだ。云々、と噂してゐるのである。これは自動車店に「汽車」と書かれたのを日本流にとつて、レールが敷かれてゐないのに汽車だとは不思議だ不思議だと首をかしげてゐるのと同類で似たやうな誤解である。中西茶館とは中國式の料理即ち支那料理と西洋式の料理との双方どちらも出来ますといふ意味である。或は洋風に西洋皿や洋

風の匙など用ひてゐるといふ意味である。それを四字句の中、西菜館として掲げたものに過ぎぬ。經營者は何れも支那人自身であつて、恐らく日本人の支那の本場に渡つて中國菜館を營んでゐるものは一人もあるまいと思ふ。知つた振りをして迂つかりしたことを云ふと、飛んだところで揚げ足をとられるのである。こゝに序でながら中西菜館のことを述べた外に中西旅館のことを云つておく。この旅館の看板に見る『中西』も勿論これと同じ意味なのである。何なら都合で中西旅館とあるのに一泊して見ると面白い。一人もそこには日本人は居はしない。この邊のことも大體辨へておいた方が赤毛套を演じなくてよろしい。

七 危険は度外視せよ

二七 支那の人は馬賊ではない

日本の人は支那に出掛けて行くと、都會でも田舎でも到る處に馬賊が充滿してゐて、誰れでも直ぐ馬賊の手に掛かり人質にされて酷い目に遭ふのだらうなどと考へてゐる。さう思つてゐるものが多い。これは又なんといふお伽噺的の考へであらう。物知らずにも程がある。臺灣の高砂族といはれてゐる有名な生蕃部落に這入つて見ても今は少しもその危険がなく、自分だちも數回その蕃界の隘勇線を越えて這入り生蕃と同じ部屋で共に寐たことがある。相手の氣質を持をよく呑み込んでその習慣に従つてゐれば、無闇みに罪も咎もないものをいきなりやつつけるなどいふことは有り得ない事である。支那には北方には馬賊(紅鬃子)南方には土匪といふ危険なものもあるが、それが絶えず新聞に恐ろしく記述されてゐるので、事情を知らぬ日本人は頭をひどく刺戟されて、鬼ヶ島の恐怖心と空想とを病的に起してゐる。

いくら支那の田舎だつて、無闇みに否應を云はせず旅行者をいきなり襲ひ之を人質にとつて危害を加へるなどと考へてゐるやうなものはない。いくら何でもゐないのである。旅の人と見れば、むしろ之を丁寧に取り扱ひやさしい態度で接してくれる。勿論その中には人好のしない者や、人相のあまりよくない者は随分ゐる。然しそれもよく眺めてゐると、羅漢のやうな顔、或は關羽のやうな顔をしたものが至つて多く、いきなり會つて悪徒の如く印象づけらるる相貌のも

のは少ない。たとひその容貌魁偉を以て聞えてゐる山東の田舎人にしても、矢張りよく見てみるとふつくらとした豪傑風の顔立ちか、さもなければ禪味を帯びた羅漢顔である。山東の天地は爾來土匪の巢窟と頭ごなしに呼ばれてゐるが、これは山東から江蘇、安徽の三省の境界地點の一局部にあるのみで、その他は極めて稀である。假令あつたとしてもわざわざその地點へ近付く必要はない。恐怖心に驅られてゐる日本人は、とかく、支那旅行中その田舎の淋しいところで遭つた人間は悉く之を土匪と早合點して、危険が身に及びはしないかと神経が手傳つて直ぐにおちけてしまふ。中には、夜路の暗らやみで擦れ違つたものと來たらすべて之を頭から怖つて、土匪であらうと心配し、ひやつとして生きて氣持がしなかつたなど脅えて物語るやうなものがある。かゝる種類の人は晝の日に支那町で出會つた多くの人でも皆之を馬賊に見、土匪と見るのであらう。これは疑心暗鬼で、人を見たら泥棒と思へといつた江戸時代のつまらぬ俗言と同じ考へ方である。いくら支那人といつても罪のない百姓もゐれば、溫和な商人もゐる譯の分つた苦力もゐる。否、さう云つたのが大部分である。新聞紙上でいくら馬賊の記事が大

きく活字で紹介されても、それは所謂ニユースとして人目を牽かんが爲めのもので、實は支那はそんな國柄ではない。ただ問題は相手かたとしての支那人どもの氣持ちが理解されてゐないことである。その爲めその様子は恐ろしげに見えたり、その話し聲の少しく高く又その意味の通じなかつたりすることから遂にその人の一言一句が何か自分の身邊に悪くみでも考へてゐるのではないかといふ風にすべての事が疑はれて來る。又總體その支那人の荒削りの舉動が慣れないために特別に物凄く振舞はるゝやうに受け取らるゝのである。

支那の人をすべて土匪であるとか、馬賊と同類であるとか云ふ風に思ひ込む人は、とても支那に行つて汽車にも乗れず、支那宿にも泊れず、田舎には勿論這入れないと云ふことになる。港にでも着いたら早速護衛をつけて、領事館の金庫の中に閉ぢ籠つてゐるより外に安全な法がないと云ふことになる。自分の考へでは、支那ほど自由な氣兼ねのない國は世界中外にないことと思ふ。いくら呑ん氣にしてゐても、更にもつと呑ん氣さを延長させたい位であり、殆んど心配といふもの、遠慮といふものゝ要らない國である。天下のこと、國家社會のこと、すべてそ

それはそれ、自分は自分だ、ときつぱりと區別をつけて考へ、度胸をきめて自分のことのみ念打ち込むことになつてゐる。支那の人の心構へはこゝにあるのである。従つてこれが又支那旅行の秘訣とも考へられてゐるのである。

かやうな支那人の主義で行く時は、何れのものも邪魔にはならない。事實皆が皆その氣でゐるから無關心主義の支那人だからと云つて妨げにはならぬ。又先方でもこちらを妨げとするものはゐない。沉んや日本人を危険な地位に陥れようとするやうなものは先づ先づゐない。寧ろどちらかといふと長年支那にゐる日本人の食ひ詰めの方が危ぶない。油斷も隙もならない。これは在留の日本人自らの口からよく聞かざるゝ話である。絶対に支那人が日本人に危害を加へた事實がないとは申さない。しかし、日本内地に於いてさへ日本人同士は互に危害を加へる人は平和を愛する民である。全くの平和の愛好者である。水村山廓酒旗の風と唐詩に歌つてゐる通りの處であり、到處春風駘蕩の氣が漲つて、桃花流水杳然として去ると云つた氣持ちが

見えてゐて少しも拘るところがない。酒々落々といはんか、我不關焉と云はんか、來たる者は拒まず、去る者は追はずと云はんか。何時行つて見ても居心地のよいところである。少なくとも自分は深くかう信じてゐるのである。

三十年、五十年と永らく支那にゐた日本人が、偶々どうかして日本へ歸朝して見ることがあつたが、日本社會に生き馬の目を抜くやうな激しい生存競争の劇烈な場面を見せつけられ、又島國的のこせこせした人間ばかりに取り圍まれ、氣をいらいらさせられるものであるから、早くも支那揚子江の廣々とした天地が戀しくなり、結局矢張り支那があこがれの國となつて早速行つた李勿勿支那へ舞ひ戻つて來たなどいふ話は一度ならず耳にするのである。かうした連中だつて特に土匪や馬賊を否認してゐるのではない。がしかし危険を度外視して、泥棒は泥棒、自分は自分と事を分けて考へ、自分の天地は無限に延長し又之を擴大もしてその領域内で樂しみを求めんとし、人生觀を立てゝゐるものであらうと思ふ。支那旅行者もこの點に就いてそれぞれ自分の旅行の天地、漫遊の前途といふものを、延びやかに平和に考へてゐることが、その行を最

も有効ならしむる所以であると思ふ。要は氣分の持ち方次第である。神經的になることは支那旅行では特に最大の禁物である。これは最初から云ふ通りであるがこゝに繰返して力説しておく次第である。

二八 旅行中の不安は無用

支那の旅行は立派な一つの技術である。この技術をうまくやつて行くのはその人に在る。それで旅行の目的を達成するにはその技術を最もあざやかに、最も愉快に、而かも支那情緒を絶えずその間に編み込み、終始一貫せる漫遊氣分で潤しながら之をやり遂げなくてはならぬのである。然るにその技術を實現してゆく上に於いて、絶えず夜は夜で支那宿の廊下が不安に思はれたり、寢臺の中で縮かまる程に脅えたり、外出すれば外出先きで危害の來ることをいつも怖つてゐたりと云ふ風に、朝は朝で、晝間は晝間で、四六時中常に不安裏に包まれてゐるやうであつては、到底支那旅行の如き情緒の纏綿せる漫遊旅程を果たすなどは以ての外と云はねばな

らぬ。かゝる不安居士、否、求めて自らその不安の専門家になつてゐるものは支那の衛生情態を見ても定めし吐氣を催し、折角の支那料理も味ひ得ないことになるであらう。これでは支那旅行をなす資格のない人と申さねばならぬ。

危険の最も多い地方は支那四百餘州を通じてどこであるかといふと上海であるといひ得る。かくの如く、四十餘ヶ國の各國民の集まれる處であり、従つて上海の町の中には恐ろしい秘密結社もあれば、共産黨員、赤化宣傳者、暗殺團、強盜、何でもある處である。上海の官憲ではそれが爲め毎年少なからぬ警察費を豫算に組んで極力之が驅除防壓に努めてゐるけれども依然としてピストル騒ぎ、その他の椿事の絶ゆる間がない。上海を一步踏み出して田舎の郊外に出かくるならば、見渡す限りの廣い野に菜種の花が美しく咲き満ちてゐる。運河を走る帆船は心ゆくばかりに順風を孕み、雲雀はどのあたりか判らぬが高い雲間よりうれしげに轉つてゐる。かうした長閑な光景が一帶に開展されて一入旅行者の旅情を慰めてくれる。又民船で乗合はせた漁父村翁だちはいともやさしく旅の話をしてくれたり、又行先きの宿屋の世話まで親切に口

添へしてくるのである。かつて自分は錢塘の田舎で乗合船の船賃の割前を船頭に手渡ししよ
うとしたのを見て老農は云ふやう。いやいや閣下は遠來の客だその議に及ばぬといふ意味で、
何としてもこちらの出したのをよろしいですよと云つて受けてくれない。のみならず旅行の前
途を懇ろに祈つてくれたと云つたやうなその慇懃さは到れり盡せりである。日本の田舎でも昨
今のせち辛い時世となつては、かゝる美談は見出すに難かしからうと思はれる程であるが、か
う云つた挿話をこゝに述ぶることが出来るのである。日本人にしてみても支那の田舎へ足を入れ
たりなどすれば、きつと冒険であるとか、きつと危険な目に遭はされるのだといふ。又暗夜轎
子で山坂でも登ればその籠昇におどかされるであらうとか、山賊に追ひかけられて八ツ裂きに
されるであらうなどと取沙汰されるのであるが、水村山廓の人情は決してそんなものではない。
いかにその醇朴であるかは實際行つて見るといふと此の通りなのである。今日尙日本人は昔の
鬼ヶ島や人喰人種の徒とこの平和の民とを同一視するとは誤解も甚だしい。こゝの處から見て
も旅行中の不安は無用であることを繰返しておく次第である。

二九 生命の保證

支那旅行に際して生命保險の加入を思ひ立つ人がだんだんあると聞き及んでゐるのである
が、別段それ程、水盃の別れをして立たなくともよろしからう。支那といふ處はすべてが運
命觀に訴へる習慣のあるところであるが、支那人間で危ぶない人と云ふのはそこにいろいろ裏
面の事件が伏在してゐる。しかしその危険な場面の主人公となつてゐる人には矢張りそこまで
來るにはおのづから由つて來たる譯が必ずあるのである。そこまでは色々長年に亘る非常な
無理が行はれてゐたり、又或る事件の爲めに相手に深刻な怨みを買つてゐたり、又莫大な財産
を作るまでにつつかり人心が放れて殆んど四面楚歌の聲になつてゐたりと云つたやうなそれら
の人々の身の上にかかることなのである。

何でも無い普通の人にさうした非常事の勃發すると云ふやうなことは常識上考へられない
ことである。こは眞理である。いくら支那だつて罪も咎もない者を、草葉の露と消え果てしめ、

異國の鬼と果てさせるが如き慘酷なことをするものはない。支那では社會意識、人情味、人間の味といふものが日本あたりよりも一層強く又大きく働いてゐるのであるから、その強大なる社會意識によつてもよく保證されて居るのである。支那のために辯護をするわけでもないが支那の人士殊に田舎に這入つて見るとその人情は麗はしく立派な社會意識がある。決して理に外れた、又人間味にもとつた仕打をするやうな、さういふところではない。

それで生命の危険云々といふ心配は全く度外視してゐて差支へないのである。見方によつては支那は絶對安全の國であり、悠久な國であり、人情味の豊かな國であるといつた積極的な考へを抱いて支那旅行をすることが安全第一の方法であるとも云へるのである。

固より病氣の點は別であつて、これには成るだけ支那料理をとり、殊に夏冬の別なく蕪や蒜の這入つたものを喰べるやうにしてゐれば、精力を増すのみではなく、尙惡疫を驅除する目的にも叶ふ。由來支那には惡疫の類は殆んどなく、氣候、風土の點から見ても天與の恵みを受けてゐる國である。旅行先きでは、讀者は毎日なるべく上に云ふ如く大蒜をとり、又食事は支那

料理を朝夕とつてゐて、之によつて病氣に罹らぬやうに豫防することが何より緊要である。要するに、支那の人と出来るだけ同じやうに食物から、衣服から、すべてその土地の式に則つて身を持してゐるやうにすれば、それが無病安全の妙策である。さうすれば自然世人の云ふ危険の話柄などは馬耳東風で旅行が出来るのである。これは支那旅行中の心得の中でも常に、必ず體得しておいて頂きたい眼目の一つであると考えるのである。

八 支那土産物の相談

支那に旅行する人々の始めから楽しみにして出かける原因の一つは、土産物を求めて歸へるといふことである。これは支那旅行の印象を永く保ち、又人に之を分つといふ意味からして、土産物は調法なものと考へられる。支那には支那獨特の織物があり、玩具があり、文房具があり、其の外身の廻りに付けるものとしては、翡翠の如き、或は金銀の彫刻物の如き、支那でなくては出来ない色々の珍しいものがある。又瀬戸物には手近いところで什錦手や螢手の茶碗

を始めとして、手土産として恰好なものが許多ある。

それ故支那旅行位土産物に豊富な所はない。随つて自分達は度々支那に往復してゐる關係から、よく人々より土産物の相談を受ける。土産物の依頼は結構である。けれども、事實旅客その人に取つて時間の都合やら荷物になる心配やらで初めの希望通りに行くものではない。殊に土産物を買ふ場所そのつづを知らなければ頗る高い物を掴まされる懼れがある。扇なれば杭州の何處で買ふ、焼物なれば上海の何處、封筒詩箋の如きものは、租界のどの店といふやうに、その適當な買い場所を豫め承知して置くことが一番便利である。のみならず其の買った品物は一々そこから旅行先へ持つて廻るのは大變であるから、普通宿から日本へ出せるだけを荷物にして出してしまふ。但し壞はれ物はその限りでない。焼物とか或は河南出土の土偶、又は精巧に出来て居る細工物、彫刻物などは送り荷物にするのは甚だ危険である。もし紫檀の卓几椅子の如き彫刻物に至つては、物が大きいだけにこれは十分の荷造りをして送らなくてはならぬのである。

近來支那の工藝美術が日本で賞美せられ、最近非常なる勢を以て流行して來た關係上、隨分許多の品物が或は土産物として、或は仕入れの品物として、京阪地方は固より、東京方面にも多く入り込んで來た。

土産物として手荷物で持ち歸る場合には、税關其の他のことが比較的簡便に行かぬ。絨氈の如き大荷物になる物であつても、これを土産物として荷造りさせて持ち歸る場合にはその十割の關稅竝に織物消費税を支拂つても、餘程安く付くといふやうな關係があつて、成るべくは土産物として持ち歸るに越したことはない。但しそのかわり手數で厄介なことは覺悟してゐなくてはならない。

近來支那で日本の旅客が餘りに土産物に重きを置くために、隨分日本から製作品を支那に輸入し、支那風に作つた更紗、絹織物或は銅器類、又は日用品で蝙蝠傘、靴下など雑多な品が逆輸入されて居る。それ故によく吟味することなくして、支那製のつもりで土産を取つて歸り親類友人などへやつて配ると、案外にもそれが日本品であつたといふやうな滑稽話を聞か

れることがあるから、その點は充分に注意をして、どの點から見ても、これは支那製であるに疑ひがないといふ見定めが付くものを持つて歸らなければならぬ。それは支那獨特のものであるれば、其の圖案に於て、又其の製作の方法に於て、何んとなき重苦しいやうな、念の入つた、さうして何處となしに物に呑氣な氣持があらはれて居るからよく判る。きやしやに垢抜けがしたやうな、輕快な形に出來て居るものには往々にして怪しいものがある。日本から支那に入る品物で、或は支那模様織り出されたる桐生足利あたりの製作品は、最も明瞭に其の日本品たることが分る。或は焼物類にしても隨分日本から這入つて居るものがあるとの事である。

要するに土産物のことであるから、必ずしも價を高く出す必要はない、支那氣分の充分に現れて、何處となしに面白味があり、さうしてそれが置物、飾物或は實用を兼ねたものといふことになつてゐれば妙である。普通支那趣味の人、或は知識階級の人に贈る物としては、近來封筒に詩箋が普通に多く用ひられて居るやうである。これは紙であるから壞はれる心配のないことは云ふまでもなく、その重量に於て或は税關の關係に於いて少しも面倒のないといふやうな

點で、一般に重寶がられる次第である。

土産物にする目的の品に關稅を多く掛けられることは詰らない。近來四割乃至五割の關稅を取られるものが隨分あるのであるから、其の邊を豫め勘定の中に入れて物を撰ばなければ全く馬鹿を見ることがある。人に物を贈るに一々税關の話をする譯にも行かず、殊に好意的に土産物として贈るわけであるから、初めから其の邊に注意して贈るのが肝腎である。

日本では土産物といへば、何んでも彼でも紙に包んで、水引をかけ慰斗を付けることが、贈り物の普通の式になつて居る。支那の品物に對しては固より日本式の水引も慰斗も結構であらうけれども、其の品物其の物に附屬して居る容れ物、其の趣きが又何んとなき價値を添へるものであるから、單に中味さへ取つて歸つて土産物にすれば宜いといふだけでは物足りない。中味と其の品物の容れ物、其の兩方が完備して、始めて一つの土産物の意味を成すものである。それ故時には包み紙などで支那式の文言の這入つて居るものや、又支那で製作された本場の屋號などの這入つて居るもの、又其の商品目錄などの刷り込まれてあるやうなものそのままつけ

て贈る方が面白い。或は其包みが結んであるところの紐なども日本の物とは全然變つたものが用ひられて居る場合が多い。それ故に出来ることならば、かやうな附屬的のものまですべて取揃へて、其の全體が一つの土産物になるといふ意味で贈る。その方が受けた人の氣持から云つても本當の土産物になるだらうと思ふ。其の意味からすれば水引や慰斗はどうでも宜しいことと思ふ。

猶此の土産物は支那の實用品或は工藝美術品であるから、隨てこの贈答といふことで支那風俗、支那文明の宣傳が出来る譯で、それを人々に見せれば又其の人は支那趣味を感ずると云ふことになるから、成るべく普及力の多い物を撰ぶことが必要であらう。又時には後から取り寄せられ得るやうな材料を土産物にする方が面白いことと思ふ。

附 翡翠の土産についての注意

近來支那の蘭とか楊柳、又は佛手柑其の他の果物、棗の罐詰など、植物や又は食物などの土産物も段々殖へて來たやうである。これなどは支那旅行の普及と共に、益々將來發展して行く

であらうと思ふ。婦人の最も喜ぶものは翡翠の土産である。唯翡翠の如きものは土産物として少し高價に過ぎる。そしてこれには頗る眉唾のものが多く、支那の翡翠専門でも油斷ができないと云ふ。専門家は曇天の日或は夕方空のはつきりしないやうな時には、實際其の取引をしないといふ位に、光線で見分けをすることが大事なことになつて居る。それだから素人が一度や二度出掛けて行つて、大膽に數百金を投じて翡翠の簪、翡翠の帶留、其の外結構な物を輕卒に手に入れて歸るといふやうなことは甚だ危ない。それ故に餘程信賴する人がない以上、此の種の品物に對しては充分慎重な態度を取ることが安全であらう。

翡翠の上物と並物とを區別する方法を専門家から聞いた所に據ると、大體次のやうな話がある。元來翡翠は緬甸と印度との境から出るので、それを取出すには貴州雲南の方からはしないで、印度の方から取りに行く。それは新嘉坡のやうな好い世界的の捌け口を南方に持つて居るからである。新嘉坡方面に出た翡翠の礦石は、多く纏めて廣東の城内へ運ばれる。廣東の城内には翡翠屋の街が出來て居て、其所では翡翠の鑑定をする。さうして其の鑑定に依て、一つの

翡翠が七八萬圓からするものもあるし、又一萬圓もしないものもある。無論これは大きな塊りで謂はば西瓜のやうな物である。一部分少しだけ擦り減らして見る、僅か中味を想像し得る程度に擦り減らして見て、さうして中を鑑定するのである。無論本當の中味が翡翠の上物であるか、或は並物以下の物であるかは、單にそれだけでは断定は下せないものであるけれども、専門家は其所が商賣であつて、狙ひを付けると、大して違はないといふことである。

其處で其翡翠の塊りを割つて見る、さうすると色の概して薄白く泌みたやうなのはいけない。成るべく緑の色が鮮明であつて、透明に近い光を有つて居る。さうして或は濃く、或は黄色味が勝ち、或は緑或は淺黄色にといふやうな、色々變化のむらがあつては良い物とは考へられないのである。固よりその大塊のことであるから、萬遍なくすべての部分が上物のみで充實してゐるとはいへない。けれども少くとも或る部分に餘りに變化のない、さうして何んともいへない玉の如き感じのする美質を有つて居る部分があればそれを上物とするのである。其の塊りを次第に割つて小さくし、日本人向きにするためには、例の帶留、簪其の他時計飾り、文房具、

印材など、あらゆる細かい玩弄品となし、裝飾となすのである。

廣東には、翡翠専門の彫刻家が居て、其の彫刻を頗る巧みにやつて居る。假令其の質の悪いものであつても、近來主として日本人が、常に騒ぐために、日本向き、日本行といふことで、頗る價格が上り、又質の餘り良くないものまでをも高く賣り付けるといふことに段々なつて來た。支那の人に云はせると、翡翠の相場の上つたのは日本人が自ら高くして持つて歸るからだ」と云つて居る。事實支那から來る商人又日本人で支那から歸るものなどが、外の商賣をして居るついでに、實は鞆の中から色々な翡翠を取り出して見せるやうな場合がかなり多い。物が小さくて、輕くて、手つ取り早く捌けるから、其方面の商賣人の殖へることは無理からぬことと思ふ。

猶支那の骨董店、茶館などに行つて見ると、「アナタ翡翠買はないか」といふ覺束ない日本語で、日本人の姿さへ見れば誰にでも賣り付けやうとして、しつこく付き纏ふ。上海五馬路の怡園などではいつも之を見る。何だか硝子製の翡翠の擬物を混雜の間に甘言を以つて客に賣り付

けるのでないかといふ感じがする。翡翠の質物は普通硝子に翡翠色を著けてあるもので、一見しただけでは殆んど本ものゝ翡翠と間違へる恐れがあるが、其の重量、硬度、膚の光澤の按梅は正しく區別がある。翡翠には精密にこれを鑑査して見ると、面に非常に細やかな縮緬皺の小波が這入つて居る。硝子の面は總體滑かであつて、殆ど斯の如き念入りの小波は認めないのである。又素人の鑑定法としては翡翠はガラスと温度が違ふといふことを云つてゐる。翡翠は甜めて見て冷たく感ずるが、硝子の方は温かく感ずるので見別けがつくと云つて居る。果してどうか自分には確かなことは分らない。

又云ふ翡翠は人造で出来てゐるものがある。それは、翡翠屋の仕事場に溜まつて居る翡翠彫刻の粉末を取り纏め之を練つて、堅く焼いた物、之を立派な翡翠として賣り出して居る場合もある。時には翡翠の粉末でもなく硝子でもなく、今少しく、軟かなもので、何んだか餛飩粉を煉つて固めた人造翡翠と云ふものも出来てゐる。これは多く珠數繋ぎにして宛然珠數の形に拵へたものである。時々怪しげな骨董屋などに賣つて居るのを見る。これは勿論明るい場所では客

に見せられない。多く古寺の奥などへ見物に來た外國人などをうまく説き付けて、恰も御寺の寶物を祕密に安く賣つて上げるといふやうな、とぼけた顔をして、其の實懷から練り物を出して、「極秘ですけれども」とうまうま持ちかける。さうして初めは高いことを云つて居るが、こちらから少し大きな聲をしてやると、寺僧は僅かに一二弗でそれを手ばなしする。寺の扉の外にあかるみに出て、太陽の光線にでも照らして見れば、それはひどい偽物であつたといふことが屢々笑話になつてゐる。

かやうな譯で一に翡翠二に翡翠と日本人はいつも騒ぐが、支那には随分な通りのあるものであるといふことを承知してもらひたい。土産物の欲しいといふ日本の近來の要求、流行に對して、支那へ旅行に出かける人は、特に此の點に注意を怠つてはならぬといふことを一言附け加へて置く。

九 都會地めぐりの地點

支那旅行中の心得として注意すべき主要なる點は、以上諸項目に亘つて大體述べ終つた。然しこれは何處までもその心得の範圍を出でない。支那旅行の眼目とするところは、甲の都會地から乙の都會地へ遊歴し、或は田舎から田舎へと廻り渡るその途々に見聞するところの異國情調、山川風土の眺め、又その中に活躍してゐる住民たちの生活ぶりからその生活の間より産出する産業上の經濟活動、或はその經濟活動をもち立てゝ行くところの風俗習慣人情趣味などといふ大きな背景を見なくてはならず、或は又これ等の諸現象を引つくるめて今日の政治情態の機微、時局の推移といふ局面をも觀たり、或は更に進んでは寺院から寺院へ廻り訪れて、その信仰方面や俗間の迷信の様相、更にまた哲學方面や思想の傾向などの方面をもその旅行者のあたま次第では視察することも出来る。或は動植物から地質礦物氣象各方面に亘つての研究も試むることが出来る。支那旅行者の使命は考へて見るとかなり廣いものである。これ等の問題に就いては、本冊子は自ら出發點を異にしてゐる。その旅行先きの或る方面を限り例へば、北支那、中部支那、南支那、或は四川の奥地などと云つた各地方のローカル、カラーを大體の

目安に、それぞれの地方の細かい特色を見、之が背景の下に見出さるゝ名所舊蹟なり、産業交通なり、宗教思想なり、又政治經濟なりと云つたものはそれぞれその旅行者の志す趣味の同伴として、追つて刊行し續篇として公にしたい考へである。

若し本書に述べた旅行心得が支那旅行をするにつけての經の案内記と評し得るならば、その各省各地巡遊の案内記は緯の視察法を紹介することになるのである。双方經緯相俟つて支那の旅行の方法を研究することは如何に支那遊歴を有効ならしむる上に大事の事であるか、説明するまでもないことである。

終りに茲には甚だ大體の骨子に過ぎないのであるが、例の上海方面と北平方面との二ヶ所を中心とした主要の都會地廻りの地點を表にして順次掲げて見よう。

上海方面

上海では

新公園

ゼスファイールド大公園

半淞園

フランス公園

公共公園

廣東公

園

太馬路の競馬場
江灣の競馬場
申園の競犬場

大世界
湖心亭

龍華の桃の花

杭州では

西湖畔
孤山
湖心亭
三潭印月
保叔塔
岳王廟
青澗寺
靈隱寺

上天竺
中天竺
下天竺
淨慈寺
煙霞洞
虎跑寺
開化寺
六和塔

錢塘の大潮
雷峰塔は今は亡し
西湖十景

蘇州では

寒山寺
留園
西園
虎邱
天平山
靈巖山
寶帶橋
滄浪亭

孔子廟
拙政園
北寺の塔
玄妙觀
獅子林

鎮江では

金山寺の塔
甘露寺
焦山島
揚州の平山堂
觀音堂
五亭橋

南京では

中山陵
明の孝陵
明の故宮
古鷄鳴寺
北極園
清涼寺
秦淮

莫愁湖
雨花臺
玄武湖
國民政府
貢院は今は亡し

九江では

甘棠湖
廬山
蓮華洞
牯嶺
五老峰
虎溪橋
東林寺
含鄱嶺

棲賢寺
慈航寺
海會寺
白鹿洞書院
秀峰寺
萬杉寺
歸宗寺

柴桑里
陶淵明子孫の宅

漢口では

競馬場
武昌の黃鶴樓の跡(奥略樓)
抱水堂
漢陽の晴川閣
製鐵所

漢水の舟
洞庭湖
瀟湘八景

宜昌では

東山寺 三游洞 靈泉寺 三峽 洩灘 巫山 白帝城 萬縣 忠州の石寶寨 長壽縣 重慶 牛奶山 成都 義眉山 岷江

河南では 洛陽 龍門 函谷關 潼關 西安 開封 安陽の殷墟

北平では 紫禁城 天壇 天橋路 琉璃廠 孔子廟 喇摩寺 隆福寺 萬壽山 天然博物院(植物園) 故宮博物院 湯山 明の十三陵 八達嶺の長城

山東では 即墨 青島 九水 嶗山 青州 淄川炭坑 濟南 千佛山 跑突泉 大明湖 曲阜の孔子廟 泰山 鄒縣 天津

山西では 娘子關 太原の圖書館 汾水 晋祠 天龍山の石佛 大同府 雲崗の石佛

寧波では 天封塔 七塔寺 天一閣 餘姚の龍山 天童寺 育王寺 舟山列島の普陀山 東錢湖 鎮海 温州 台州 福州廣東では 福州の鼓山 烏石山 南臺の長橋 閩江 廈門の鼓浪嶼 汕頭 潮州 香港のピーク・ケーブルカー 廣東の沙面 河南街 香山

附記

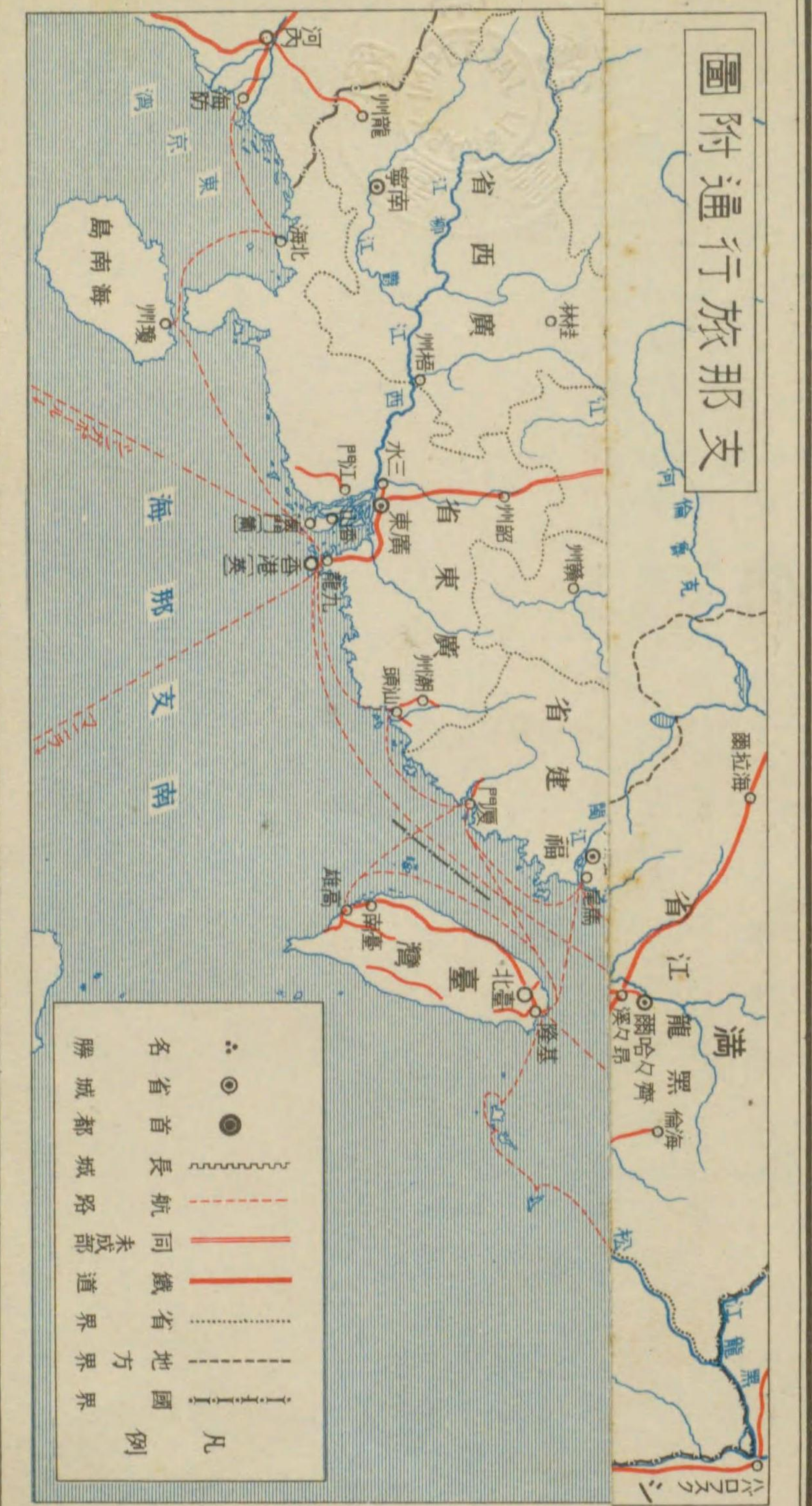
尙この支那旅行通の参考書として、更に観光客がその旅先の智識を豊かにし、一層通の特色を發揮せんとするものには、既刊の拙著中に次の如きものが出てゐるのでこゝに序でながら之を附記しておく。

- 支那文化の研究(3.50. 富山房)
- 支那趣味の話(3.00. 大阪屋號)
- 支那遊記(3.50. 春陽堂)
- 阿片室(2.50. 萬里閣)
- 眠れる獅子(2.30. 萬里閣)
- 支那今日の社會と文化(0.50. 文明協會)
- 文字の沿革(4.50. 日本大學)
- 支那民情を語る(4.50. 雄山閣)
- 支那長生秘術(3.50. 富士書房)
- 支那風俗の話(2.80. 大阪屋號)
- お隣の支那(1.80. 大阪屋號)
- 支那行脚記(2.90. 萬里閣)
- 青龍刀(2.30. 萬里閣)
- 支那國民性講話(1.00. 日本大學巖翠堂)
- 支那地圖(1.00. 神谷書店)
- 支那の風景と庭園(2.00. 雄山閣)
- 翰墨談(4.00. 富士書房)
- 支那料理通(0.70. 四六書院)

支那旅行通として、心得ておく可き事柄は、土産物と云はず、番兵の事と云はず、貨幣の事便所の事、山水の事何一つどうでもよいと云ふものはない。こゝには一々之に觸れるわけにも行かないから唯その各方面に亘る小著の表題を挿入して江湖の注意を喚起するに止めておく次第である。

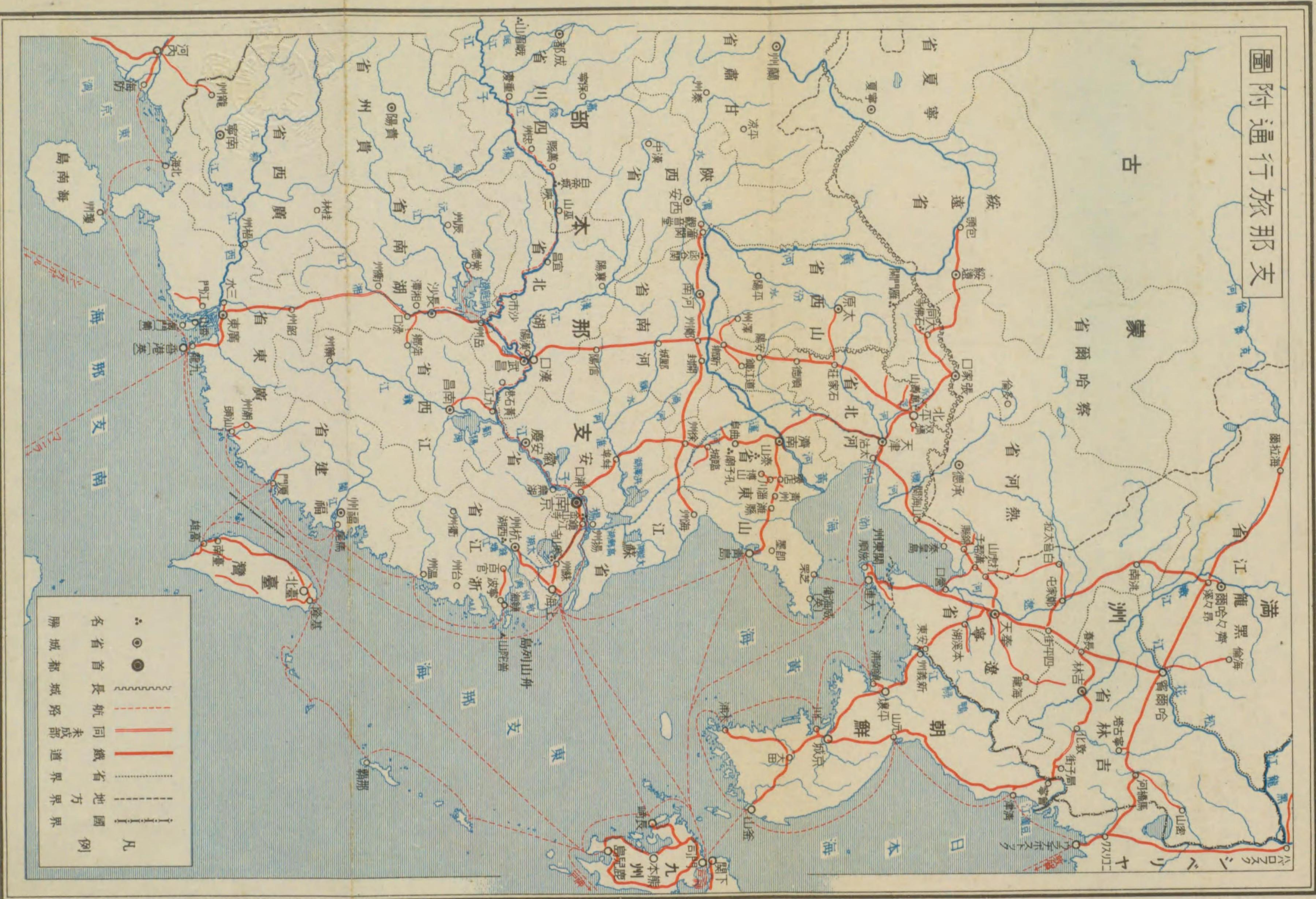
支那旅行通 終

支那旅行附圖



支那旅行附圖

支那旅行通行圖



例 凡

- 國界
- 地方界
- 省界
- 鐵道
- 未成部
- 航路
- 長城
- 都城
- 省首
- 各名勝

印刷發行
 昭和五年三月五日初版
 昭和五年三月十日初版

書名	支那旅行通
定價	金七十錢
著作者	後藤朝太郎
發行兼印刷者	東京市神田區通神保町一番地 四六書院 代表者 荒井左吉
印刷所	東京市外蒲田 三省堂蒲田工場
發賣所	東京市神田區通神保町一番地 株式會社 三省堂 (振替東京三一五五五番)
發賣所	大阪市南區順慶町通一ノ四一 株式會社 三省堂大阪支店 (振替大阪八一三〇〇番)

不許複製

行發院書六四

訣秘のそと法技競雀麻

錢八料送 錢卅圓壹價定 頁二六二版六四 著光茂 林

喫茶とケーキ通	銀座通	日本俗曲通	カフェー通	鰻通	洋装通	果物通	新劇通	映畫通	支那料理通	スポーツ通
門倉國輝著	小野田素夢著	中内蝶二著	酒井真人著	入江幹藏著	マス・ケイト著	齋藤義政著	水木京太著	立花高四郎著	後藤朝太郎著	廣瀬謙三著
俳優通	日本料理通	酒通	をどり通	煙草通	歌舞伎通	西洋料理通	ダンス通	支那旅行通	西洋音樂通	日本音樂通
川尻清潭著	樂滿齋太郎著	鈴木氏亨著	小寺融吉著	石川欣一著	伊原青々園著	秋山徳藏著	坪内士行著	後藤朝太郎著	小松清著	田邊尙雄著

裝美・外内頁〇〇二各・版六四各・定豫の版出々續下以

B.1 賣發堂省三・錢八料送各・錢十七價定各

602
1

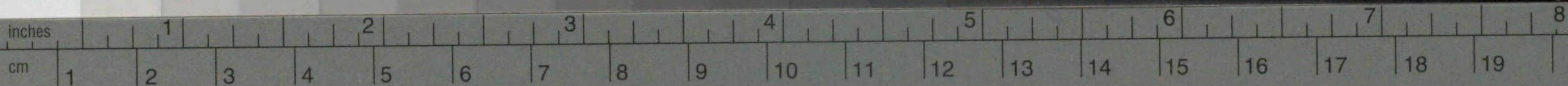
2

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

